

『三言』を粉本とする都賀庭鐘作品の 受容と発展について

－『英草紙』と『繁野話』を中心に－

陳 婧

日中両国は一衣帯水の隣邦で、昔から広範な経済、政治と文化交流がある。日中交流史上、かつて2回の高潮が現れたことがある。一回目は唐代に見られ、当時の交流は日本が唐に先進的な政治制度を学ぶことを主とした。中国古代の科学技術と政治文化思想が大いに日本社会の発展に寄与した。二回目は江戸時代に現れ、文学、文化の交流を主としたのである。この時期の日中間の交流も同様に日本社会にとって、発展の推進力になったと思われる。

江戸時代の日本では、町人階層の力がますます強くなり、それに伴って、町人文化も発展を遂げた。その中の代表的なものは「読本」という庶民文学様式が挙げられる。読本は十八世紀中葉から幕末頃にかけて上方、次いで江戸中心に刊行された、近世小説の一ジャンルである。日本の読本小説という新しい文学様式は中国白話小説から重要な影響を受けたのである。馮夢竜の『三言』（『喻世明言』、『警世通言』、『醒世恒言』の総称）は中国短編白話小説の傑作として、中国文学史上重要な位置を占めている。『三言』を始めとする白話小説が日本文壇へ与えた影響は、新しい文学ジャンルの読本を生じさせた。この読本は低迷する浮世草子を駆逐してしまい、当時の文壇に画期的な刺激を与えたのである。」^(注1) 都賀庭鐘（享保三－寛政六頃、徳川中期の読本作者）は江戸時代の翻案小説家で、読本の鼻祖と称される。彼の書いた『英草紙』と『繁野話』は日本初期読本の代表である。「近世読本の祖と言われる『英草紙』などの誕生は、かやうな支那文学流行の機運の刺戟された結果にほかならない。続いて『繁野話』、『莠句冊』などの類書が出版された。孰れも支那文学に俟つ所が少くないのである。此等の影響関係については、諸家によって注目されているのであって、古く既に諸越の『吉野』（前川来太 天明二）、『凧草紙』（森羅子 寛政四）等の書に、その原據の一部分が示されている。」^(注2) したがって、都賀庭鐘の『英草紙』、『繁野話』と馮夢竜の『三言』の関係を考察することは、中国白話小説が江戸文学にいかなる影響を与えたかを検証することであり、日中文化交流史において重要な意義がある。

『英草紙』、『繁野話』において、多くの作品は中国白話小説からの翻案で、特に『三言』から深層の受容が見られることは既に先行研究が明らかにしている。研究史を遡ると、中村幸彦や小川陽一や徳田武などが大きな成果を収めている。徳田武の『近世近代小説と中国白話文学』の中で、このテーマに関する受容研究が多くなされている。中村幸彦も『英草紙』を校注する際、その翻案作品の典拠をいろいろ指摘した。また、王曉平は『近代日中文学交流史稿』の中で、江戸文壇が中国文学からの受容状況を詳しく記している。厳紹盪、王曉平の二名による共著『中国文学在日本』において、都賀庭鐘の初期読本がいかん『三言』を受容したかを詳しく検討している。まず、テーマの骨組みを変えずに、翻訳部分はかなり大きな比重を占める。次に、粉本をもとにし、人物と筋を少し改変している。

第三に、原作の筋とテーマを切り捨て、ストーリーを再編したものもある。しかし、管見の限り、先行研究の多くは粉本の典拠について論じるが、粉本と翻案作品の相似点を分類して論じる研究はまだ少ない。本稿はそれら先学の研究を踏まえて、粉本と翻案作品をテキストに基づき、物語の表現と言語において、受容と相似点をより全面的に比較してみたい。また、今まで都賀庭鐘作品の中国文学からの受容と変容についての研究が学界の主流となっており、翻案作品が粉本からの発展についての研究はまだ少なく、本論文はそこに力点を置いて、何か自分なりに新しい観点を打ち立てられたら、幸いだと思う。

一：物語の表現の受容と相似性

1. 人物形象の類似

小説という文学ジャンルでは、物語のテーマと人物の性格は筋の発展とともに展開され描かれる。庭鐘の初期の読本には『三言』の人物設定に共通点が多い。例えば、『警世通言』の第一巻「俞伯牙摔琴謝知音」を粉本とした『英草紙』の第三話「豊原兼秋音を聴きて国の盛衰を知る話」という文である。^(注3) まず、「俞伯牙摔琴謝知音」の筋を簡単に紹介する。「戦国の時、楚の俞伯牙は晋に仕えて上大夫の地位にあった。晋公の命を奉じて楚に使した。その帰途、中秋の夜、漢陽江の河口で停泊中に琴を奏した。これが縁となって、近くの馬安山集賢村に住み鐘子期と知り合い、その学識、人物に心打たれて義兄弟の契りを結び、一年後の再会を約して別れた。翌年の約束の日に伯牙が訪れた時には、鐘子期が死んだ百日後であった。伯牙は鐘子期の墓に詣で、追悼の曲を奏し終わると、墓前で琴を砕いて壊した。伯牙の琴を理解してくれる人がいなくなったのを嘆いたからであった。」^(注4) 一方、翻案の「豊原兼秋音を聴きて国の盛衰を知る話」の筋は次の如くなっている。「豊原兼秋は大夫将監で、もともと笙の家元豊原家の人で音楽の妙手である。元弘の乱のとき、京都追放になった。ある日、還城樂を吹いて思いがけなく気持ちのよい音色が出たので、必ずや帝の運が開かれる事を暗示していると思った。兼秋の推測はまもなく事実になり、以前の俸禄を返され、伊予国は宣旨の使者とされた。その帰途の仲秋の夜、讃岐国風が浦で停泊中に琴を弾いた。一本の弦が切れたがきつと誰か聞いているに違いないと兼秋が思っていると、一人の木樵りが現れた。その人は鶴足郡の山中村に住む横尾時陰という人で、八幡太郎から琵琶を伝授された家柄である。二人はお互いに尊敬しあって義兄弟の契りを結び、横尾家再興の計画を相談しようと約束した。そして一年後の再会を約して別れた。翌年兼秋が再び訪れた仲秋の日は、時陰が死んだちょうど百日後であった。兼秋は時陰の墓前で、追悼の一曲を弾いたあと、琴を切り割った。琴の秘曲の伝えは兼秋にのみ残っており、時陰が亡くなった後はもう理解できる人がいない。これからは琴を弾いてもしょうがないというのが琴を捨てる理由である。最後に兼秋は山中村へ行き、時陰の代わりに両親の世話をすることになる。」^(注5)

表 1

粉本（原作）	翻案
俞伯牙摔琴謝知音	豊原兼秋音を聴きて国の盛衰を知る話
俞伯牙	豊原兼秋
共通点：官職がある人、琴の名手、知音を失った後、官位と俸給を放棄して、山で隠遁の生活を過ごすことになる	
鐘子期	横尾時陰
共通点：貧民、音楽のよい理解者、知己を得て、一年後の再会を約束したが、若死	

粉本と比較し、翻案のストーリーの筋には改変部分もあったが、主人公の身分や登場人物の関係や結末は変更されなかった。上の表によれば、「兪伯牙捧琴謝知音」中の伯牙は才能がある官吏で、琴の名手だった。鐘子期は親孝行で樵だったが、楽器をよく知っており、そのうえ、演奏者の気持ちをよく理解した。この二人は得難い知己だった。「豊原兼秋音を聴きて国の盛衰を知る話」中の豊原兼秋は尊敬する勅使で、横尾時陰は樵だった。しかし、横尾は音楽のよい理解者で、琴の歴史をよく理解していた。二人は意気投合し、互いに認め合った仲であった。主人公の身分と関係が粉本によく似ている。官吏と貧民は芸術により、知己となった。この二つの物語の結末は、いずれも官吏は知音を失った後、官位と俸給を放棄して、山で隠遁の生活を過ごすことになる。この両話は、才能に恵まれる普通の樵を設定した。都賀庭鐘は文学の素養があつて、中国の文化に通じていた。したがって、彼の翻案作品では物語の人物像が巧みに表現された。

『英草紙』の第二話「馬場求馬妻を沈めて樋口が婿と成る話」は、『喻世明言』第二十七巻の「金玉奴棒打薄情郎」を翻案したものである。これは駒田信二が『今古奇観 三言二拍抄 下』の中で指摘している。^(注6)「馬場求馬妻を沈めて樋口が婿と成る話」という物語の主人公の人間像も「金玉奴棒打薄情郎」のに類似性がある。以下の表は簡単に人物対照を示したものである。

表2

	粉本	翻案
		金玉奴棒打薄情郎
ヒロイン	金玉奴	お幸
共通点	社会の最下層の乞食頭領の娘で、卑しい生まれ、軽蔑されていた。夫を支えていたが、忘恩不義の夫から川に投げ込まれた。地位が高い人に救われ、結局、もとのように夫婦に戻ることができた。	
ヒーロー	莫稽	馬場求馬
共通点	貧乏な人、妻のおかげで出世できた。妻を嫌うようになり、赴任の途中で妻を川に突き落とした。上司から結婚の話を持ち出される。新婚初夜に自分が娶りたい人が意外に元の妻だと気づいた。数人の女中に棒で打たれ、花嫁の前に引っぱられた後、悔悟し、寛大な許しを頼み込んだ。最後に夫婦は仲直りした。	

翻案の馬場求馬は身分が高いが、貧しい浪人で、粉本の莫稽は貧乏な読書人だった。両話女主人公お幸と金玉奴はいずれも社会の最下層の乞食頭領の娘で、類似する身分を持っていた。卑しい生まれ、軽蔑されていたという設定は後の矛盾に伏線として敷かれていた。馬場求馬はその後高い地位につき、お幸を嫌うようになり、赴任の途中で妻を川に突き落とした。この点で「金玉奴棒打薄情郎」とも合致している。その後、馬場求馬は新婚初夜に自分が娶りたい人が意外に妻のお幸だと気づいた。打たれ叱られて教訓を受けた後、馬場求馬は悔悟し、寛大な許しを頼み込んだ。最後に夫婦は仲直りし、お幸の父親浄応を迎え孝養を尽くした。ここの馬場求馬は粉本中の新婚の寝室で悔い改めた薄情者の莫稽という人物と同じようである。この両話、いずれもやさしく寛容な妻と虚栄心の強く、浮気な夫を描写している。

2. ストーリーの発展の過程の相似性

『英草紙』の第八話「白水翁が売卜直言奇を示す話」の構想は、『警世通言』の第十三巻「三現身

包竜凶断冤」に借りている。^(註7) まず、粉本の筋を紹介する。「兗州府奉符県の押司孫文は相士李傑から、今日の三更三点子の時に死ぬと言われた。果たして、その時刻に妻と下女迎児の目の前を、面をおおって走り出て河に身を投げた。のち夫人は亡夫の同僚で同姓の小孫と呼ばれていた男を夫に迎えた。その後、下女の迎児が台所で働いていると、死んだ孫文が現れて恨みをはらしてくれと言った。それを知った夫人は迎児を嫁にやっ、家から追い出した。その迎児の前に、さらに二度、孫文が現れ、恨みをはらしてくれと頼んだ。この頃、奉符県の知県に赴任してきた包拯の前にも孫文は訴えた。包拯が調査に乗り出し、迎児を呼んで事情を聴き、事件は解決した。夫人がかねてより小孫と通じており、相士のことばを利用して小孫と謀り、夫を殺して台所の井戸に埋め、小孫が芝居をして迎児の目の前を走り出て、河に石を投げて投身に見せかけたものであった。」^(註8) 翻案の筋は次の通りである。「室町時代の頃に和泉の堺に白水翁という人がいて、いつも大鳥神社の辺の常席へ売トに行っている。ある日、この土地の郡代の出張所勤めを拝命している茅淳官平が占いを見てもらったが、白水翁にその日の三更子時死ぬと言われた。腹を立てた茅淳は家に帰って妻の小瀬にお酒を勧められて寝た。そして、三更子時に彼は寝室から飛び出し、海に近い水中に飛び込んだのであった。百日の後、小瀬は二・三回親戚から再縁するよう勧められたので、入り婿を希望した。ちょうど同じ郡役を拝命している権藤太という、官平とも平常交際している人が茅淳の家に入り婿して相続したいと申し出る。そこで、小瀬は権藤太を入れて官平と改名させた。その後、下女の安はかまどで先の主人の惨めな様子を見たため、夫人によって商人の段介にあずけられた。ある日、安はまた先の主人の幽霊にあって、一袋の金子と一枚の臨終の際の一句、つまり「要知三更事、可開火下水」と書いた紙を渡された。一方、和泉国の殿様がある夜、絞殺された人が願いの書状を奉った夢を見た。その書状にも、「要知三更事、可開火下水」と書いてあった。殿様はこの意味がわからないので、人々に説明してもらおうとした。段介は安から渡された紙を持って、殿様に茅淳の家のことを全部話した。殿様はうなずいて、官平夫婦を裁きの場へ呼び出し、一方数人の者を官平の家に派遣して、かまどをこわさせた。先の官平の死体が発見された。これを見て、もとの権藤太も白状した。二人の罪人は死罪との裁きを受けた。」^(註9) 都賀庭鐘が編集する過程の中で、前者の物語の前置きを略して、初めに直接本題に入る一方で、基本的な筋は保持された。以下の表は粉本と翻案の筋の対照を簡単に示したものである。

表3

	粉本	翻案
	三現身包竜凶断冤	白水翁が売ト直言奇を示す話
物語の始め	占い師は孫文に酒を購入させず、しかも今年今月今日三更に死ぬと断定した。	茅淳官平が占いを見てもらったが、白水翁にその日の三更子時死ぬと言われた。
筋の過程	孫文は妻と下女迎児の目の前を、面をおおって走り出て河に身を投げた。	茅淳官平は寝室から飛び出し、海に近い水中に飛び込んだのであった。
	夫人は亡夫の同僚で同姓の小孫と呼ばれていた男を夫に迎えた	小瀬は権藤太を入れて官平と改名させ、再婚した
事件の解決	死者の魂が包拯の夢の中に現れ、自らの死因について話し、包拯が調査に乗り出し、迎児を呼んで事情を聴き、事件は解決した。	和泉国の殿様がある夜、絞殺された人が願いの書状を奉った夢を見た。段介は安から渡された紙を持って、殿様に茅淳の家のことを全部話した。事件は解決した。

「三現身包竜凶断冤」は、前置きのあとに、占い師が孫文に占うという筋を続けた。占い師は孫文に酒を購入させず、しかも今年今月今日三更に死ぬと断定した。このような冒頭は物語の発展に神秘性を彩った。これも都賀庭鐘が狙った効果だった。そのため、「白水翁が売ト直言奇を示す話」は以上の占いの筋を留めておき、ただ人物が侍に変更されたにすぎない。この侍は家に帰ると、占い師の言ったとおりに三更に死んだ。その妻が百日後再婚したという筋も両話は同じだ。その後、死者の魂が判者の夢の中に現れて、自らの死因について話し、侍女の証言によって、共謀した犯人を見つけたという筋も大体同じである。このように、庭鐘は『三言』の中の生き生きとした物語を話の本質はそのままに、日本の小説として再創作することに成功したのだ。

『英草紙』と『繁野話』とは中国の白話小説を改編している過程で、話の本質を留めることによって、中国の文化を吸収して、テーマを強調した。そして、その手段が翻案の大切な方法の一つである。庭鐘の作品からは、『三言』をうまく模倣する才能が見える。

二：言語方面の相似性

1. 翻案作品の多くは粉本の翻訳

言語の表現に着目すると、庭鐘の翻案作品の文の多くの箇所が粉本と同じまたは類似しており、原本の忠実な翻訳とも言える。

『英草紙』の第九話「高武蔵守婢を出して媒を成す話」は『諭世明言』の第九巻「裴晋公義還原配」に拠った翻案作品である。^(注10) 文章の中に、執事が勝子を額田に還した時は、執事ことば穩にして、「偏が昨日のものがたりを聞きしより、惻然としていたましく、食もくんだり兼ねたり。偏に久曠の歎あらしめたるは、偏に我が罪なり。」次郎左衛門はるかにすさつて、「鄙人困窮して智短く、心神顛倒、昨日の無礼言語に絶す。願はくは、執事の海量、これを許すことを容れ給へ。」執事いふ、「今日吉日なり。それがし媒人をなし、足下の婚を完うすべし。行費の資千貫、備州への下し文、ここにあり。婚儀成つて後、于飛して任に趣くべし。」額田ただひたすら頭を地につけて拝す。」(都賀庭鐘著 中村幸彦校 1995 : 187 - 188) 下線を引いた部分は全て粉本と同様の表現がなされており、原本の忠実な翻訳といってもよい。

「白水翁が売ト直言奇を示す話」は「三現身包竜凶断冤」を粉本とした作品である。両話の占トの描写はとても似ている。原本の「三現身包竜凶断冤」の中には次のような部分がある。—先生道「上覆尊官、這命難算。」押司道「怎地難算?」先生道「我不諱、但説不妨。」先生道「實不相瞞、主尊官當死。」又問「卻是我幾年上當死?」先生道「今年死。」又問「卻是今年幾月死。」先生道「今年今月死。」又問「卻是今年幾月幾日死?」先生道「今年今月今日死。」再問「早晚時辰?」先生道「今年今月今日三更三點子時當死。」押司道「若今日真個死、萬事皆休;若不死、明日和你縣衙理會。」先生道「今夜不死、尊官明日來取這斬無學同聲的劍、斬了小子的頭!」押司聽說不覺怒從心上起、惡向膽邊生、把那先生倅出卦鋪去。先生道「若要奉承人、卦就不准了;若説實話、又惹人怪。此處不留人、自有留人處。」歎口氣、收了卦鋪、搬在別處去了。」(馮夢竜著 严敦易校 1987 : 175)

「白水翁が売ト直言奇を示す話」の中にも、このような描写がある：茅淳官平が卦象を問うた時は、白水翁が「此の卦占ひがたし。早く帰られよ」といふ。此の士心得ぬ体にて、「我が卦何のゆゑにトひがたき。察するに卦のいづる所よろしからず、あらはにしめしがたきことあるか。いむことなく示されよ」といふ。翁もとより言葉を飾らず、「拙道が卦による時は、貴君当に死し給ふべし。」此の士

いふ、「人死せざる道理なし。我幾年の後か死すべき」。翁云ふ、「今年死し給はん」。「今年の中、幾の月に死すべき」。「今年今月死に給ふべし」。「今年今月幾日に死するや」。「今年今月今日死に給ふべし」。此の人心中に怒を帯びて再び問ふ、「時刻は幾時ぞ」。「今夜三更子の時死に給はん」。此の人おぼえず言葉を厲くしていふ、「今夜真に死せば万事皆休す。若し死せずんば、明日儻をゆるさじ」。翁いふ、「貴君明日恙なくば、来つて翁が頭をとり給へ」。此の人彼が詞の強きを聞きて、いよいよわかり、翁を床より引きおろし、拳を挙げて打たんとす。(中略)「翁一口の気を歎じて云ふ、人の心に応ぜんとすれば、卦の言にそむく。卦の実を告ぐれば人の怪をおこす。此の所にとどまらずとも、己自留る所あらん」と、卦舗を拾収めて、別処に去りゆきぬ。」(都賀庭鐘著 中村幸彦校 1995: 164-166) この占ト部分の描写は両話とも似ているが、下線部はほぼ同一の文であると言える。作者は原本の文をほぼ改変することなく、直訳したのである。

都賀庭鐘の翻案作品の中には、こうした粉本を参考し、模倣したところが数多く存在する。従って庭鐘の初期読本の中の多くの言語表現も原本の類似或いは完全に同一となるような直訳が見受けられる。

2. 言語の通俗化の傾向

馮夢竜は『三言』において、小説は警世、諭世、醒世の機能があり、民間的、市井的、庶民的な審美能力に適合すべきだと主張した。可一居士によって書かれた「醒世恒言一序文」は小説の社会的な機能を強調している。作品の主旨となる戒めを人々に意識させ、教化という社会的な機能を通俗的な言葉や意味深長な表現で綴られるストーリーの筋と結びつけた。その手段で、読者がより物語を受容しやすく、更に何度読み返しても飽きない工夫を施した。したがって、馮夢竜は小説は大衆の教養と審美の能力にあわせて表現されるべきであり、大衆の道德意識を目覚めさせる役割を果たさねばならないと強調したのである。江戸時代の日本文壇には、『三言』の小説観の影響により、勧善懲悪の思想と通俗的な文体が一致すべきだという風潮が現れた。

都賀庭鐘は『英草紙』の序文で自分の小説観を明らかにしている。庭鐘は自分が「一畝の民にして」「風雅の詞に疎きが故に、其の文俗に遠からず。草沢に人となれば、市街の通言をしらず。幸にして歌舞妓の草しに似ず」(都賀庭鐘著 中村幸彦校 1995: 20) と考えた。彼は『英草紙』を当時流行していた享楽と滑稽を求める低俗な小説形式と区別するとともに、古い時代の読み手を極端に選ぶ貴族文学とも区別した。通俗的だが、「鄙言却って俗の倣となり」(都賀庭鐘著 中村幸彦校 1995: 20) というように、庶民の審美能力に合致する作品こそ、大衆に受容されやすいと主張した。都賀庭鐘の通俗化の必要性という小説観と馮夢竜の小説機能についての考え方が類似していると言えよう。

三：都賀庭鐘作品が『三言』からの発展

1. ストーリーの自然さ

都賀庭鐘は中国の『三言』を粉本をとし、中国の物語の筋と書き方をほとんど改変なく翻案するとともに、粉本より発展した所も見える。その物語の筋をもっと自然に発展させたことが最も際立つところである。

『英草紙』の第四話「黒川源太主山に入って道を得たる話」は『警世通言』の第二巻「莊子修鼓盆成大道」を粉本として翻案されたものである。^(註11) 粉本は莊子が死んだ後、楚の貴公子が訪問に来た

時、「田氏は一目で楚の貴公子の男振りにあだな心を動かされましたが、残念ながら言いよるてだてもありません」（千田九一 1958 : 288）と書いた。田氏は楚の貴公子に対して一目惚れしたようで、多少読者に不自然な感じを与える。しかし、翻案作品の中に、源太主は重い病を得た時、「二万の道竜といへる医師を呼びて、治療を施す」、源太主は死ぬ時、「二万道竜は師弟の分あればとて、一入別ををしみ、遺命に従ひて」「毎日来りて、霊位を拝し、墓地の用意葬家の弁ずべき事など沙汰しける」「深谷も道竜が此の頃心を用ひて、万とりまかなふを、便なき折柄うれしと思ふ」（都賀庭鐘著 中村幸彦校 1995 : 80 - 81）。深谷の道竜に対する愛は、道竜が彼女の主人の葬儀を手伝ったために、次第に育てられてきたのである。このようにして更に自然で、道理にかなっている。

また、庭鐘は「白水翁が売ト直言奇を示す話」の中でも、合理的な形に改変した。粉本の「三現身包竜凶断冤」の中には、大孫押司が死んだ後、押司の妻が再婚を勧められた時、三つの不合理な条件を提示し、ちょうどこのような3つの条件をすべて満たした小孫押司が現れた。これは偶然がもたらす問題解決方法と言える。庭鐘の翻案作品の中の小瀬は「この家にありて入舎の丈夫を迎ふる事ならば、責めて家をたつるを以て心やりとせん。他家に嫁し行くことは、決して本意にあらず。」「両親得心の上は否むべきにあらずと、何ごとも親のはからひにまかせ」（都賀庭鐘著 中村幸彦校 1995 : 169 - 170）と言って、権藤太と夫婦になった。このように、特別な条件を設置するのではなく、主人公の問題が自然に解決されることができ、ストーリーの展開はなめらかで自然に見える。

2. 文章の怪異性、興味性を強めること

都賀庭鐘の『三言』を粉本として翻案された初期読本の多数は、その作品のストーリーの筋と人物は粉本と多いに類似性があるが、原本から発展したところはいくつもある。小説の怪異性は必須要素で、作品の可読性を強め、読者の興味を引くために、とても重要な役割を果たすことができる。都賀庭鐘は粉本に基づいて、この怪奇性を一層際立った。

例えば、『繁野話』の第五話「白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話」という文章である（以下は「白菊」と略称する）。「白菊」の構成は『喻世明言』の第二十巻「陳從善梅嶺失渾家」（以下は「陳從善」と略称する）から多くのことを依拠し、唐伝奇「白猿伝」の旧趣からも設定をかりた作品である。^(注12)

表 4

粉本	翻案
陳從善梅嶺失渾家	白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話
なし	古人云、鬼神と山魅の類と幽現の別あり。山魅木客罔両猿狐の類は皆形体あるの物、(中略)骨肉は土に属し、其気の発揚して空にあるを鬼の神といふ。
なし	出る時は一片の雲となりて飛行す。故に人より名をつけて飛雲といふ。(中略) 仏神もこれを制することあたはず。
拔出所配宝劍、劈頭便砍。申陽公用手一指、其劍反着自身	手ばやく左の手にて握りとどむ。続て来るを右の手につかむ。間もなく来る三の矢を口にくはへて嚙とどむ。(中略) 一身に劍刺如く覚へず居ずくまつて動き得ず。

以上の表の様に、「白菊」の文章の始めは、「古人云、鬼神と山魅の類と幽現の別あり。山魅木客罔両猿狐の類は皆形体あるの物、時あつて形を隠し時あつて形を現す。是にさへ靈明を使ふに巧拙の分あり。巧なるは物を役使し人の敬を發さしむ。拙きは靈を仮して人に役せらる。鬼は人没して土中に帰の名なり。骨肉は土に属し、其気の發揚して空にあるを鬼の神といふ。」(都賀庭鐘著 徳田武校 1992 : 46) 等と粉本がない鬼と靈怪の長談を加え、物語の伝奇的な雰囲気醸し出す。それから飛雲の神通力を描写して、「出る時は一片の雲となりて飛行す。故に人より名をつけて飛雲といふ。其本身は獼猴の精なり。神代よりここにすみて神通広大変化きわまりなし。朝夕霧をふらして山深き所を人に見せず。欲しき物を摂り偷事心に任せざるなく、時々人をたぶらかし害をなせども、仏神もこれを制することあたはず。」(都賀庭鐘著 徳田武校 1992 : 48) と飛雲の神通力を誇張した。飛雲の典型的な神通威力の表現は、守廉と交戦した一節で見られる。守廉が飛雲に向って矢を射た時、飛雲は「手ばやく左の手にて握りとどむ。続て来るを右の手につかむ。間もなく来る三の矢を口にくはへて嚙とどむ。すかさずしきりに射る矢を悉く払のけ一つも身にあたらず。守廉着忙拔設て切てかかるを、大名きつと見むく眼のひかり、一身に劍刺如く覺へず居づくまつて動き得ず。」(都賀庭鐘著 徳田武校 1992 : 63) 守廉の手練の矢も刀も飛雲にあつては何の效も奏さなかつた。この描写は、人間の力量が及ばぬ飛雲の神通を形象化している。飛雲の非凡化の意図を様々の趣向を以って具体化したのである。

しかし、「陳從善」において、陳從善が申陽公を斬ろうとした時に、「拔出所配宝剑，劈頭便砍。申陽公用手一指，其劍反着自身」(馮夢竜著 趙俊玠 文飛校 1985 : 284) と極めて簡単な概括的な表現に過ぎない。陳從善の劍を避けることを数語で描いたのみで、読者にその威力の具体的なイメージをあまり与えられない。妖怪の靈力を非凡に造型する意図は、明確に窺うことができないのである。

要するに、粉本の申陽公より、翻案の飛雲の非凡さや脅威的な靈力が強調されて、庭鐘の造型した妖怪像は、その非凡な神通威力においてはるかに申陽公を凌駕している。物語の靈異性を粉本より一層発展させたと言える。

また、「三現身包竜図断冤」を粉本として翻案された作品の「白水翁が売ト直言奇を示す話」には、怪異性も強調された。原本には、包竜図の断案過程が長く複雑で、詳しく描写されている。「大女子，小女子，前人耕來後人餌。要知三更事，撥開火下水。」(馮夢竜著 严敦易校 1985 : 184) という言葉への解説と分析もとても詳しい。この具体的な断案過程は包竜図の果斷と知恵をもつたずば抜けた断案才能を著しく示す。しかし、「白水翁が売ト直言奇を示す話」という翻案作品は、案件を審理する過程を大いに減らし、国守が案件についての分析はさほど詳しくない。そのため、この冤案の解決において、国守が包竜図のように才気を奮うことはあまり多くない。断案者に対する知恵と断案才能も粉本より、さほど称揚されていない。そうすると、公案小説の傾向が弱くなり、それと相反して、怪異伝奇の味わいが濃く感じられる。庭鐘の怪異化の趣向が見受けられる。

四：まとめ

以上を通し、私たちは庭鐘の翻案の優秀さを窺うことができる。『英草紙』と『繁野話』とは中国の白話小説から影響を受けて、その小説を消化する過程で、粗筋を参考にしたり、僅かな変更をしたりするが、人物描写やストーリーにはたいへん留意している。

『英草紙』と『繁野話』は『三言』との類似点が多い。言語表現の相似性が特に目覚しい点である。この点から中国の白話小説がいかにかに日本の江戸文学に直接的な影響を及ぼしたかが明らかになる。言

語の側面から見ると、庭鐘の翻案作品の多くの言語表現は原本からの類似表現或いは忠実な翻訳で、粉本と数多くの共通表現が存在している。また、庭鐘が小説言語の通俗化を強調した点も、馮夢竜の持つ庶民的な小説観とよく似ていることが読み取れる。庭鐘の翻案作品において、『三言』と比較して、様々な類似点が見受けられる。いずれも都賀庭鐘が日本人の心を引き付け夢中にさせるために、中国の奇談の本質を吸収した表れである。

庭鐘は粉本の物語の筋に拠って、大きな変更を行っていないが、微細な点に注意を払い、翻案の本筋はある所で粉本より更に合理になった。翻案作品のストーリーの筋は粉本よりもっと自然に見える。また、庭鐘は様々な手法を使って、翻案作品に粉本よりもっと奇異な色彩を賦与し、魅力を与えた。翻案作品はより一層読者の心を引きつけることができ、粉本を基礎としたうえ、粉本をより発展させた新しい翻案作品と言えるであろう。『英草紙』と『繁野話』は初期読本の代表で、都賀庭鐘読本文学の登場は新しい文学様式が創立された標識である。「『西山物語』『雨月物語』などの作品を誘出した、読本の嚆矢であり、一大傑作である。」^(注13) この文学様式の出現は、小説創作の方面においても、読者の鑑賞においても、強烈な刺激をもたらした。その後、読本文学は興り始め、中国白話小説を粉本として翻案された作品が次々と発表された。多くの「水滸模倣作品」は江戸文壇を席捲していった。伊丹椿園の『両剣奇遇』、『唐錦』などもあった。十八世紀末から舞台は江戸に移って、長編小説が登場し、曲亭馬琴を代表として多くの作者は長編小説を精力的に述作することになる。山東京伝は『桜姫全伝曙草紙』を創作し、滝沢馬琴は28年を費して、『南総里見八犬伝』九集106冊の長編小説を完成した。これらの作品は中国起源の題材と表現手法を日本の文学伝統と結びつけ、日本読本小説の成熟を促した。

中国文学の影響で生まれた庭鐘の読本作品は、庭鐘の優れた創作手法で発展を遂げ、後世の日本文壇に深遠な影響を与えた。「読本と中国白話小説」において、徳田武は、『繁野話』の「江口」と森鷗外の「舞姫」の共通点や類似性などを次のように指摘している。「近代小説たる「舞姫」が、「テーマ小説」と言われるように明確なテーマを有し、人間性を描写したことはいうまでもないが、その構成は、読本がすでに備えていたものと大きく異ならないし、テーマも当時の支配的価値観のために女の情を棄てるという点で、読本の一編たる「江口」と似かよったものだった。つまり「舞姫」は、人々が思っているよりもはるかに近世小説臭を残している作品なのだ。」(諏訪春雄 日野龍夫1977: 74-75) よって、森鷗外の「舞姫」は「江口」から大きな影響を受けた作品であることが分かる。今まで庭鐘の読本作品が後世に及ぼした影響についての先行研究は多く現れたが、まだ時代の連貫性を欠き、不十分だと思われる。今後は「舞姫」のほかにも、庭鐘作品から深遠な影響をうけたであろう日本文学に目を向けていきたいと考えている。

注1：劉潔秋「中国「短編白話小説」と江戸「読本」の比較研究－『三言』と『英草紙』を中心に」、『季刊日本思想史』(36)、ペリかん社、1990、pp28、

注2：麻生磯次『江戸文学と中国文学』で指摘されている。麻生磯次、三省堂、1976、pp88

注3：「豊原兼秋音を聴きて国の盛衰を知る話」は「伯牙捧琴謝知音」を粉本とした翻案であることは、『英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語』の解説部分で明らかにされた。中村辛彦、高田衛、中村博保校注・訳、小学館、1995、pp589

- 注4：小川陽一『三言二拍本事論考集成』、新典社、1981、pp101
- 注5：劉潔秋「中国「短編白話小説」と江戸「読本」の比較研究」－『三言と『英草紙』を中心に』、『季刊日本思想史』(36)、ペリかん社、1990、pp35
- 注6：駒田信二、松枝茂夫 訳『今古奇観 三言二拍抄下』、平凡社、1958、pp382
- 注7：「白水翁が売卜直言奇を示す話」は「三現身包竜図断冤」を粉本とした翻案であることは、『英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語』の解説部分で指摘されている。中村辛彦、高田衛、中村博 保校注・訳、小学館、1995、pp592
- 注8：小川陽一『三言二拍本事論考集成』、新典社、1981、pp121
- 注9：劉潔秋「中国「短編白話小説」と江戸「読本」の比較研究」－『三言と『英草紙』を中心に』、『季刊日本思想史』(36)、ペリかん社、1990、pp44－pp45
- 注10：駒田信二、松枝茂夫 訳『今古奇観 三言二拍抄下』、平凡社、1958、pp379
- 注11：駒田信二、松枝茂夫 訳『今古奇観 三言二拍抄下』、平凡社、1958、pp381
- 注12：「白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話」は「陳從善梅嶺失渾家」を粉本とした翻案であることは、麻生磯次『江戸文学と中国文学』で指摘されている。麻生磯次、三省堂、1976、pp94
- 注13：尾形仸、松田修、服部幸雄、前田愛 編『近世の文学 下』、有斐閣、1977、pp26

参考文献：

- 駒田信二、松枝茂夫 訳『今古奇観 三言二拍抄下』、平凡社、1958
- 諏訪春雄、日野龍夫『江戸文学と中国』、毎日新聞社、1977
- 千田九一 訳『今古奇観 上』、平凡社、1958
- 高柿之助『万葉集二』、岩波書店、1978
- 谷脇理史『近世文学論集－小説と俳諧』、富士印刷社、1971
- 徳田武『近世近代小説と中国白話文学』、汲古書院、2004
- 徳田武、横山邦治校注『繁野話 曲亭伝奇花叙児 催馬楽奇談 鳥辺山調絨』、岩波書店、1992
- 中村辛彦、高田衛、中村博保校注・訳『英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語』、小学館、1995
- 中村正明編・解説『草双紙研究資料叢書 第4巻』、クレス出版、2006
- 日野龍夫『近世文学史』、ペリかん社、2005
- 小川陽一『三言二拍本事論考集成』、新典社、1981
- 王曉平『近代中日文学交流史稿』、湖南文芸出版社、1987
- 嚴紹盪、王曉平『中国文学在日本』、花城出版社出版、1990
- 嚴紹盪『中日古代文学関係史稿』、湖南文芸出版社、1987
- 張如意『日本文学史』、河北大学出版社、2004
- 趙俊玠、文飛『喻世明言』、陝西人民出版社、1985
- 嚴敦易『警世通言』、人民文学出版社、1987
- 劉潔秋「中国「短編白話小説」と江戸「読本」の比較研究」－『三言と『英草紙』を中心に』、『季刊日本思想史』(36)、ペリかん社、1990

The acceptance and development of Tsuga Teisho work which modeled 《Stories from a Ming Collection》

Chen Jing

Representative works of Japan initial readings are influenced by Chinese vernacular novels of Ming and Qing Dynasties, and resemble the 《Stories from a Ming Collection》 in many cases. Tsuga Teisho absorbs the essence of the strange story of China, and puts his attention to the story and portrait. Many language representations of the adaptation work are the faithful translation or similar expression from the original. There are similarities with original and adaptation. Teisho has emphasized the popularization of the novel language, that is very similar to the folksy novel view of Feng Menglong. Teisho pays attention to the minute points, the story of adaptation becomes more rational than original. Teisho can use various techniques, confers a strange color to adaptation work. So it is possible to attract the reader's mind even more, and we can find out the excellence of adaptation of Teisho. It can be said that adaptation work is a new adaptation work which is based on original, and is more developed than original. It has deeply influenced the literary world of Japan.